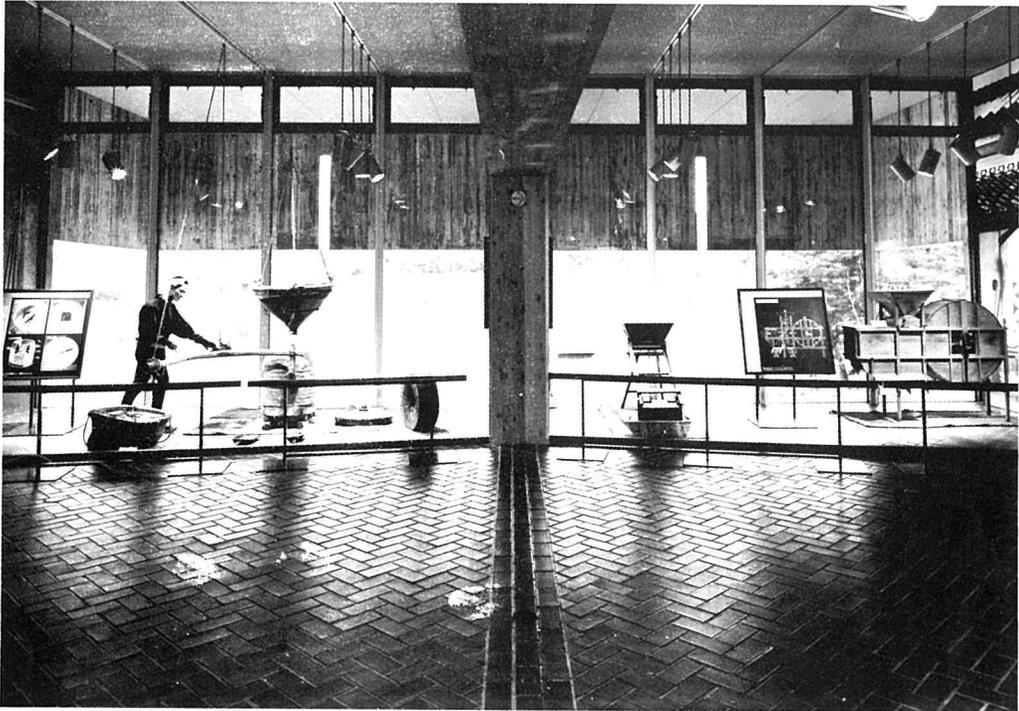


# 民俗博物館だより

Vol. II No. 2

1975. 8 . 5



展示室（稲作コーナー）

## 目 次

地方博物館を考える（その1）	1
オショウライ迎え（奈良県の民俗行事）	3
灌 漑（収蔵資料の紹介）	4
体験学習講座と民俗講座	5
大和の六斎念仏講（フィールドノート）	6
博物館の利用状況・おしらせ	7

# 地方博物館を考える (その1)

近年社会教育への関心が深まるにつれて、社会教育様関の一つとしての博物館の重要性が認識され、明治100年に当たる昭和42年から45年にかけて各地に多くの博物館が設立された。その中には必ずしも目的と性格が明確とはいえない博物館も少なくないようである。そして「地方博物館の独自性とは何か」「地域に根ざした博物館活動とは？」といった問題が未解決のまま、その後も博物館ブームが続いている。そこで、当博物館の活動の反省も含め、地方博物館の果たす役割を再確認する意味からこのテーマを取り上げてみた。今回はいわば総論として「地域における民俗博物館の役割」を、又各論として「郷土博物館における民俗資料の収集について」を執筆いただいた。次回は他館の活動状況を報告いただき、次いで当博物館を振り返ってみたいと思う。

## 地域における

### 民俗博物館の役割

国学院大学博物館学研究室 加藤 有次

最近富に公立博物館の設立が目立って、斯道においては喜ばしい次第であるが、応々にしてその目的が不明瞭であったり、博物館側とその利用側との親近感が乏しいようである。これは博物館運営上の最大の問題でもある。博物館がある目的によって働きかける対象となるものは、当然博物館が存在する地域住民(地域社会型博物館)であるか、また一方研究機関としての博物館(研究型博物館)あるいは観光地に存在する博物館(観光型博物館)は、更に拡大された地域の人々への公開であり、その活動範囲は極めて広域に亘る。学問の世界に国境がないのと同様その博物館にも国境はないといえる。このように博物館は性格によって対象者は異なるが、公立博物館は三者三様の必要条件を具備する必要がある。

博物館には先ずその目的に即した内容のカラーが要求される。例えば県立民俗博物館であるならば、県民には、その自然と風土の中で過去から現在へいかなる暮らしを人々がして来たかという様相を理解させ、現状から未来を見つめるにあたり刻々と変容する県土と暮らしを、じっくり考えさせることにその博物館の意義が存在するのである。そのためには、博物館人の充分なる学術的研究を根拠として、他県のそれに比べても特色ある県立博物館独自のカラーをもちたいものである。

博物館の独自のカラーとは、考古館・民俗館・歴史館とか理工科学館という専門性のカラーではなく、同じ民俗館でもその県土でなければ育たない研究の独自性を生み出すことが必要である。そうした独自性の中から生み出される博物館の教育活動は、一度見学したからもう博物館に行く必要はないということではなく、何回でも通いつづけるうちに利用者が学習の領域を拡大していく満足感を持てるようなものに育って行くであろう。

日本の教育は、学校教育を中心とした文字媒体による

教育に傾倒してきたが、博物館は、学校教育の枠をこえた、いわば不特定多数の社会教育の場であり、また物質媒体による教育を主体にしている。この物質が、時間的・空間的に人との交わりによって生活の様相を物語り、文化を象徴するのである。

博物館では、人が文字によって意志を伝達するのと異なり、ある事象を如実に「物」が物語ってくれるのであり、その教育効果は極めて有効なものといえる。それには、博物館資料としての物質のとらえ方が重要となる。

従来博物館における考え方は、ややもすると「物」を美術的、骨董的あるいは歴史的稀少価値観でとらえられてきたむきがある。有名作家の作品や歴史的な価値のある古文書、また名もなき作者の作品といえども歴史的、美的評価のある「物」は絶対価値といえるもので、国宝・重要文化財、重要美術品等はすべてこれに該当する。これらの博物館資料としての一等価値は誰でもが評価し、またこのようなものが多く収蔵されていれば立派な博物館とされてきた。

しかし、これは大きな間違いで、むしろそれに対して誰もが気づかなかった「物」の価値評価を発掘することが博物館の大きな役割なのである。博物館学芸員の役割は、目的に応じて収集された資料を学術研究し、整理保存し、または展示その他の教育普及活動を行なうものと今日考えられているが、この機能は互いに目的に応じて循環するものであり、その過程の中で「物」の偉大なる価値を発見することもある。これこそ博物館資料としての「物」の一等価値といえるものである。

このような価値評価を仮に創造価値としよう。この創造価値は路傍の石ころでも、草木でも一等級のものをもつことができる。特に民俗資料の場合はこの価値観を積極的に求める事が必要である。例えば民俗博物館で「人の暮らしと農具」という展示をやろうとした場合に、農具は人の生業に欠くべからざるものの一つとして一等級の創造価値をもっている。その農具は、当然地域の自然環境によって特質が生ずるものであるから、自然を舞台にしていかなる人の生活の知恵を駆使して農具を考え、創

りだされたかを示すと同時に、その農具の合理的機能を示し、それぞれの時代の中で人々がどう暮しを立てていたのだろうかということを表示することになるであろう。

民俗資料は、人々の生活の汗のにじみついたものであり必ずしも美しいとはいえないが、そういう中に博物館資料としての新しい価値を見いだす必要がある。民俗博物館では、あらゆる「物」を対象として過去から現在に至る資料を収集し、保存し、幾重にも活用していかなければならない。そこに未来社会を創造する知恵の泉として民俗博物館の存在意義が育まれるであろう。

## 郷土博物館における 民俗資料の収集について

文化庁 大島 暁雄

東京都下、多摩地区の民俗資料を収集、展示している博物館施設の学芸員諸氏が「背負子の会」という研究会を組織して、各館における種々の問題や、広く民俗学・博物館学諸般にわたる問題点を持ち寄って精力的に取り組んでいる。この研究会の存在は早くから聞いていたが、参加の機会を得ないまま今回はからずもこの研究会に御案内いただき、予想以上の真摯な意見の交換を得て、地域と密着した博物館活動の一端を見たような貴重な勉強をさせていただいた。

この「背負子の会」は、各博物館で実際に民俗資料の収獲・整理・展示・保管に携わっている現役のエキスパートばかりの集まりで、今回は「郷土博物館における民具の取り扱いについて」をテーマに研究会が持たれたが、特に民具の調査と収集のあり方について活発な意見の交換がなされた。このように現場で活躍されている学芸員諸氏の問題意識の鋭さは、この種の経験に乏しい私にとって、一つ一つが説得力に充ちた本質的な問題を感じさせられることばかりであった。席上、先に宮本馨太郎編「民具資料調査整理の実務」の中で『民具の調査と収集』と題して発表した私の考え方について、数多くの御教示を得たので、前著を補足する意味も含めて、ここに現在考えている点を述べて大方の御叱正を仰ぎたいと思う。

博物館における調査の必要性は今更に述べるまでもなく、各地の博物館では調査報告書や研究紀要の形で既に多くの成果をあげている。しかし、このように調査の必要性が認識されているにもかかわらず、調査に裏付けられたところの計画的・体系的な資料の収集は、各地の博物館を見る限りはなほだ否定的な現状にあるといえるのではないだろうか。

「民俗資料はガラクタばかりで、スペースばかりを占め、どんなに収蔵庫を作ってもすぐに満杯になってしまう」といった声は各所で聞かれ、現実には収蔵庫が満杯となって開店休業状態にある博物館の例もまた多い。こうした博物館は、どこを見ても同じような民俗資料ばかりが雑然と収納され、全く特色のない面一的な内容の博物館となっていて何ら魅力のない、従って地域からも遊離した



クチナシ

いわば死んだ博物館となっている。

調査・収獲・展示とが同一線上で考えられるべきものであることは、前著の中でも述べているので詳述することは避けるが、博物館の特色を示す最も効果的な手段である展示は、その館の学芸員の主体的な問題意識に基づいた計画的な研究発表の場であって、その前提には、事前の綿密な調査と体系的な資料の収集とがなければならない。さて、ここでは体系的収集ということについて考えて見よう。体系的収集とは無目的的な収集に対応して用いられる概念で、ある一定の作業体系なり目的に応じた基本的な民具を収集することである。即ち、収集に当たっては収集可能なもの全てを無批判に集めるということではなく、博物館側からの一定の選択行為が必要であり、現実に遺品がなければ復元製作による収集も考えねばならない。この選択の基準となるものはその博物館の目的及び性格と、それに基づいた調査記録の集積である。

しかし、現実に体系的収集を妨げているものは慢性的な人員不足と学芸員の事務の繁雑化であり、後者は無目的的な資料の収集によってもたらされている所が多いと考えられる。この点からも博物館資料の整理が必要である。体系的収集に対する実に大きな問題の一つは、各地の博物館の多くが資料収集の大部分を寄贈という手段に頼っていることであろう。このことは、地域住民との連繋や現今の異常な古民具ブームによる民俗資料の売買に、博物館が無意識に荷担することがないなどの大きなメリットを持つ反面、博物館の立場に立った独自の収集整理を困難なものにしている原因の一つと考えられる。

こうした実情にあって、各地では独自の効率的な調査収集活動を実施し、更に研究を重ねていることと思うが、その一例として神奈川県横須賀市博物館の例を考えて見よう。同館では収集資料を直ちに館有品として登録せずに、寄贈者名・採集地・採集年月日・採集時の状況・採集者等の必要事項を記入した受入簿に記載し、破損の甚だしいものなど博物館資料として受入れの好しくない資料は、その理由を明記した上で廃棄し、更に収蔵台帳に記載登録する時点で同様な選択を行なうという。

このシステムでは、寄贈者の好意は記録として永久に残り、恣意的な資料の取扱いも防げ、更に資料選択のための時間的余裕もあって、資料の選択整理にはより効果的な方法と考えられる。しかしこれとても前提として豊

富な調査記録の集積があって始めて選択が可能であり、学芸員にとっては根本的な問題はあくまでも解決されていない。その意味で学芸員個々に課せられた責務は大きい。要は受入れから博物館資料としての登録の間に、いかに調査記録の集積に努力して行くかが大切で、当初は集めながら学んで行く過程で資料の選択整理を実施して行くことになる。

なお、展示と保存とは博物館の持つ本来の機能である

が、同時に互いに排反する側面を持つ。現在は数多い民俗資料とはいえ、後世への文化財の伝達、保存という観点からの資料の取り扱いにおいては、展示及び活用資料とは別に保存用資料としての選択整理も必要であろう。

いかにしても、体系的な調査収集とそれに伴う資料の選択整理は、現実的な多くの困難を乗り越えて実現すべく、誰しもが考えなければならない大きな問題であることには異論のないところであろう。

## オショウライ迎え

### —奈良県の民俗行事—

毎年それぞれの村を単位として繰返し行なわれる行事を一般に年中行事と呼ぶ。8月中旬頃に行なわれるお盆もその一つであった。昔は、旧暦の7月中頃から行なわれていた。奈良県では一般に8月13日から15日頃にかけて盆行事が営まれている。お盆は、死者の霊や先祖の霊を家に迎え、供物をそなえて供養する行事である。この源流を遡れば、目蓮尊者が餓鬼界に落ち、苦しみをうけている母を救済した、という仏典「盂蘭盆経」に由来し、我が国では推古天皇14（606）年に盆供養が修せられたのを最初とし、古代には皇族や貴族たちに受けとめられた。たとえば、古代後期にその勢力を傲った撰閥家藤原道長の日記から毎年7月14日に盆供行事が行なわれていたことを知る。また、この行事は、古代貴族から中世武家へも受継がれた。平経高の日録からもその有様が窺える。中世の後半頃からようやく一般民衆に盆行事が根をおろしてきた。

\* \* \*

今日、民衆の間で行なわれているお盆の行事は、いくつかの変化をもたらしたものである。大和郡山市外川町では8月13日夜墓へ参って、それぞれの墓域内を掃除し、ご先祖さま、あるいは新しく仏になった肉親の霊を迎える。これをオショウライ迎えという。家々の仏壇には13日までに仏壇を掃除し、供物を準備しておくのが常であった。14日には寺から読経にくる。そして、8月15日の夕刻には仏＝オショウライさんを送る。また、新仏がある家は、8月7日から盆行事が行なわれる。7日以前に新仏＝アラホトケのためにアラタナの準備をする。この時、アラホトケのために館を作った。今ではほとんど自家の



オショウライさんの棚（奈良市南古市）

ものではなく、館を買ってくる<sup>註③</sup>。この盆供を一般に七日盆という。これに対して、奈良市佐紀町の8月10日から盆行事の用意と夜に墓参りをすませる場合を十日盆という。また、8月20日に行なう二十日盆もある。佐紀町では、墓参り後、13日夕刻に村の辻でオショウライ迎えをした。また、アラボトケのある家は8月13日に家の裏縁で迎える<sup>註④</sup>。アラタナは、他所と同様に仏壇の横に設ける。奈良市南古市町でも8月13日にオショウライ迎えがある。昔は、この前日12日を初盆と称し、午後から供物を買いに市内鳴川町の徳融寺近辺にたちならぶ露店商まで出向いていった。14日にはお寺さんが来て読経する。そして、15日は夕刻オショウライさんを送り、盆行事が終る。アラボトケがある家は、アラタナを設けた。そして、アラボトケのために館を13日までに自家でつくるか（写真参照）既成のものを買ってきた。自家のものは、7日の土用にマコモを刈りとり乾してからつくる。

一方、平群町福貴では、8月3日から4日にかけてお盆の供物などを買に行き準備をする。8月7日にはアラボトケのためアラタナを作った。13日には、ゴグソク（仏具）を磨き、光沢がよければ仏さんは機嫌がよいと、また光沢がわるければこの一年何かよくないことがあると言われた。14日にはオショウライさんを迎える。迎える時、村の辻でオガラカ麦ワラをたいた。15日にはオショウライさんを送る。アラボトケのある家は、今では8月19日に村人がそのアラタナの家に行ってタナマイリをする。また、20日には村の辻でアラタナを焼く。ここでは、アラタナを家の裏縁に置いて迎えず、仏壇の横の床間にアラタナを設け、そこへアラボトケを迎えた。

\* \* \*

オショウライさんを迎えるお盆は、それぞれの地域で少しづつ違った様子を示すが、先祖の御精霊を迎えそして送るという精神は、いまま人々の心の底にある。しかしこの行事も時代の流れとともに変化しつつあることも事実であった。（奥野 義雄）

註①、「御堂閔白記」上巻（『日本古典全集』所収）

②、「平戸記」一（『史料大成』32所収）

③～⑥、中西功、村田友治郎、中川英子、藤本義光、奥田権治の諸氏からの聞き書きによる。

# 灌 漑

## — 収蔵資料の紹介 —

(4)

今回は稲作の灌漑に関する収蔵資料を紹介します。

奈良県は概ね温暖で気候的にはめぐまれているといえるが、地域によってはかなり差があり、それぞれ特色のある気候を示している。特に著しいのは、南部の吉野山地と北部の奈良盆地の違いである。吉野山地は表日本式気候の影響をうけた山岳気候で、年間雨量が多いのに比べ、奈良盆地は瀬戸内気候に類似した盆地気候で年間雨量も少ない。

奈良盆地では集約的な稲作地帯である事とも関係して、稲の生長期にあたる時期の灌漑にあたっては、昔から苦労がたえなかった。また必要な水を確保するために多くの溜池が築かれ、奈良盆地の特色ある風景として知られている。

### ○クルマ (足踏式揚水車)

水位の低い水路から田に水を入れるのに使用する。水路の水が豊かであれば自然に田へ水を導けるが、奈良盆地のように溜池の限られた水に頼る事が多い地域では、この水車を使う場合が多かった。この水車は板の羽根を回転させて水を上げるのであるが、ちょうど手で水をかき上げるような仕組みであるため、あまり水位が低いと使用出来ない。水車の半分近くが水に漬る程度の水深が必要である。溜池の水が底をついた場合などは、そこに水車を何段にも据え水路へ水を流したそうである。

水車が高価なものであったためか、共同(2~3軒)で所有していた場合が多い。それは、水利という共通の利害に関わるため、共同作業するのもにも便利であったのかも知れない(図参照)。

### ○スッポン

これは板を合わせて作った木製の桶のようなものである。この中に弁のついた木製のピストン<sup>トイ</sup>があって、これを小刻みに往復させて水を上げる。ピストンと桶の底と本体に、計4ケの弁があり、往復運動によりピストン上部に水がたくわえられ、桶の上方から水がこぼれ落ちるという構造である(図参照)。

スッポンは持ち運びや据え付けも水車より容易であり、水を高く持ち上げる能力にもすぐれていたが、手で操作しなければならぬので大きな田には向かず、せいぜい5畝程度の小さな田で使用したそうである。当館所蔵の2点共小さな田の多い大和高原から収集されたものである。

### ○ミズカエオケ

溜池や川より上方にある山田に水を入れるのに使用された。桶に取り付けた4本の網を二人で持ち、ブランコのように操<sup>あやつ</sup>って水を汲み上げた。スッポンや水車よりも古い形の用具であるが、田の条件によっては便利な事もあるので、たびたび使われていたようである(図参照)。

### ○ハネギツルベ

田の中に堀られた非常用のノイドから水を上げるのに使用した。

雨の少ない年、奈良盆地では田植に必要な水は溜池でなんとか間にあわせたが、稲の生長期に必要な水は非常用のノイドに頼らねばならない事もあった。平素ノイドには木の蓋をして上に土をのせ苗を植えておいた。ハネギツルベは横棒を1本の支柱で支え、一方に石のおもり



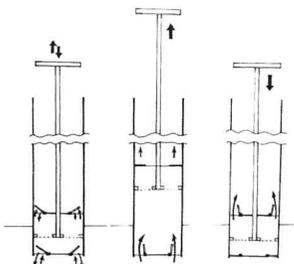
1 クルマ (水車) 踏み



2 スッポン



4 ハネツルベオケ



3 スッポンの構造



5 ハネツルベ (野つるべ) 使用風景

をつけた簡単なものである。

普通これを操作する時には二人でやったが、一人が水の入った桶を引き上げる時に、もう一人がおもりのついた方を引いて補足した(図参照)。

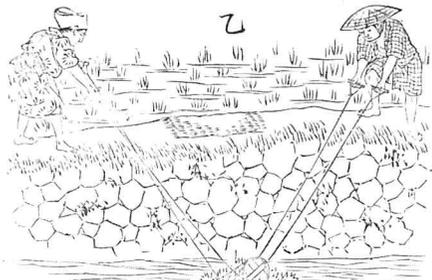
○トユ(灌漑用)

田と田の間に小川や農道があり、それを越えて水を導く場合に使われた。

平坦な場所ではなく、各々の田に段差のあるようなところで使われた。また水車を使う時、水路から目的の田まで少しはなれている場合などにもこのトユで水を導く



6 ミズカエオケ



7 ミズカエオケ使用風景

こともあったらしい。

その年の気候や地形によって影響を受ける田の水利条件に応じて、いろいろな形の用具が使われたが、今日では吉野川分水なども完成して水利も安定し、その上動力ポンプなどがよく普及しているので、水に対する苦労も昔よりずいぶん楽になった。これと平行するかのようには天候などの自然条件に対する関心もうすれて、稲作の無事を祈る数々の農耕儀礼も忘れ去られていくようである。

(大宮守人)

※使用写真注

○クルマフミ

昭和48年7月、三宅町小柳にて演出撮影  
広岡平一氏協力による

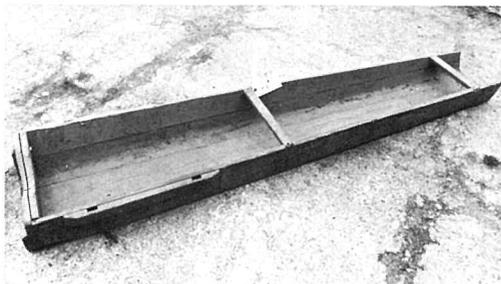
○ハネツルベ(野つるべ)使用風景

当館展示パネルより

○ミズカエオケ使用風景

奈良県立図書館蔵「農具学」P292より

(大宮守人記)



8 灌漑用トユ

## 体験学習講座と民俗講座

### ★体験学習講座

この講座も9回を数え、そのたびに参加して下さる方も徐々にふえ、館の活動として定着しつつあるように思われる。4月27日は「竹馬・竹トンボづくり」、5月25日には「お手玉づくり」、そして9回目の6月22日には「桶づくり」を行ないました。竹馬・竹とんぼそしてお手玉づくりでは、講師の方の「遊びというのは、自分で工夫しながら遊び道具を作り上げていくプロセスそのものに楽しみがある」とのお話に、怪訝そうに耳を傾けていた子供達も、慣れぬナイフや針をもて余しつつも自分なりのものを何とか作り上げ、講師の方のお話にも納得のいった面持でした。「桶づくり」では、様々な道具を使い分ける鮮やかな腕さばきに、参加者は食い入るように見入っていましたが、昔は竹クギで接合していたクレを、今は接着剤を用いていると知った時は嘆息にも似たよめきが起きました。また「最後のクレをどのように竹で接合して丸い桶にするのか」といったかなり突っ込んだ質問もなされ、関心度の強さが窺われました。

### ★民俗講座

第5回民俗講座は、6月8日「大和の道しるべ」と題して、奈良教育大学名誉教授の堀共甚一郎氏に講演をお願い致しました。旅の発生とその施設について簡単に触れた後、道しるべの写真パネルと拓本、古地図を駆使して、道しるべの持つ機能と、形態上の多様性及びその特徴や彫刻文の内容等についてお話し下さいました。



竹馬・  
竹トンボづくり



お手玉づくり

# 大和の念仏講

—フィールドノート—

古くから大和・奈良にも村単位で仏教信仰の小さな組織があった。村々でその呼び名は異なるが、一般に〈念仏講〉と称されている。この講にもいくつかの種類があった。たとえば、大正期に奈良市内にあった「尼講」や「信貴講」「観音講」は市域ではみられなくなってきた。また、春日大社を本願とする「春日講」もほとんど衰退してしまっただ。この「春日講」は、現在大和郡山市石川町の在家で行なわれており、一年に一度村人が集う。一方、「六齋念仏講」も頻繁に行なわれた。今も奈良県下の各地域で行なわれている。この「六齋念仏講」は「鉦講」とも呼ばれ、現今の8月15日前後に行なわれるお盆に、村の家々へ行って六齋念仏を唱した。また、新しく仏を出した家へも行き、その通夜に六齋念仏を誦唱した。

\* \* \*

この「六齋念仏講」は、古くは中世にまで遡る。村々を単位として組織されたこの念仏講の講衆はその村の墓や寺に一つの石碑を建立してきた。たとえば、北葛城郡香芝町の場合も「六齋念仏」のためとして、弥陀の石仏を寛正四(1463)年十月十五日に建立していた。また、宇智郡牧野村畑田＝現五条市の西福寺内に「六齋念仏供養」として、延徳二(1490)年九月十五日に建立し、多数の講衆の名が刻み込まれていた。六齋念仏講衆の切なる願いをこめた供養碑であった。講を構成する村人たちの信仰を通じた悲願かもしれない。

この村を単位とする「六齋念仏講」が、吉野山の勝手社へ梵鐘を施入することもあった。「六齋念仏之衆」など11名の勧進によって、永禄八(1565)年八月五日に梵鐘を五貫文で別註し寄進したのである。この念仏衆は「六田念仏」衆であった。また、永禄十一(1568)年三月廿三日に生駒市菜畑の村でも「南無阿彌陀仏」の六字名号碑が建立され、「六齋夜念仏一結衆」の28人と居念仏9人の切なる願いが込められていた。また、六字名号を彫った六齋念仏講衆の石碑は、磯城郡初瀬町初瀬＝現桜井市の村にある万福寺に慶長十四(1609)年二月廿四日に建立されていた。この時には、萩原、三谷白木、白石、吐山などの16の村々から「六齋念仏弟子衆千人」が生きている間にあらかじめ自分のために仏事を行なう逆修供養のため参加していた。一つの小さな〈大字〉単位の村だけでなく各地の村々の六齋念仏の講衆が参集したのである。江戸時代初頭の和の農村落の村と村との結びつき方が示唆されよう。

\* \* \*

かつて大和の各地で行なわれ、あるいは現在も受け継がれている六齋念仏講の一つである奈良市南古市町のそれも、昨年8月のお盆の行事をもって講は解散してしま

った。同様に奈良市佐紀町の六齋念仏講も一昨年10月に解散したと、講衆の一老翁が話してくれた。

南古市町の六齋念仏講が残した鉦の裏側縁には「明和元年<sup>甲</sup>11年26日」「古市村講中」や元禄年間、嘉永年間の年紀銘をもつものがあり、この講衆が生きつづけた証が窺える。ここでの六齋念仏は、シセン、バンドウ、サイノカワラ、ミダノガン、ナナツゴ、ハクマイの六齋である。お盆のときは、「賽の河原」と「七つ子」を除いた四齋を現講衆七人を2組に分け二齋づつ唱えて、それぞれの家へまわる。葬式のときは六齋とも唱えた。「賽の河原」は子供をなくした親、「七つ子」は親と別れた子供についてである。一般に「三ツ鉦」と呼ぶのは「坂東」と「弥陀の願」であって、「弥陀の願」は踊り念仏のものといわれる。ここには、六齋講所有の水田があり、講衆全員が耕作し、その収穫物をネハンサン(釈迦が入滅した日＝涅槃)のとき寺で寄合う費用などにあてた。ここにも興味ある、かつての村落の共同体の存り方を示唆する遺制がある。ここでは、それぞれの儀式のとき、鉦だけ叩くが、奈良市八島町や佐紀町ではタイコも使用する。



奈良市南古市の六齋念仏講

佐紀町ではすでになくなったが、八島町ではいまも行なわれている。かつて、六齋念仏講衆16名であったのが7名になった。また、一応世襲的な色彩をもった南古市町の六齋念仏講もいまはない。大和の各地に残る石碑が示す限り、寛正四年にはすでに存在していた六齋念仏講の灯も時代とともに消えさろうとしている。すでに消えさって久しい奈良市法蓮町極楽寺、秋篠町、安堵村大宝寺、桜井市萱森などの六齋念仏講と同様に過去のものとなっていくであろう。

(奥野 義雄)

参考文献

- ①土井実『大和金石文集』
- ②仏教大学民間念仏研究会編『民間念仏信仰の研究』資料編
- ③『奈良県風俗誌』奈良市篇

## 博物館の利用状況 (昭和49年11月10日 ～50年6月30日)

当博物館は、全国でも初めての県立の民俗専門博物館として、関係諸機関注視の中で昨年11月10日に開館したが、開館以来約8ヶ月の入館者総数は15,976名に上り、一日平均にすると83名となる。前半3、4ヶ月は相対的に利用者が少ないといえるが、これは季節的に冬期に当たっていたということと、民間企業と異なり、P.R.方法も地味である為広く周知せしめるには時間を要することなどが影響しているものと思われる(図表参照)。

博物館の利用では、小中学生の場合郷土学習の進行に合わせて利用するというケースが多く、3月、5月に小人(団体)の入館者が多いのは、学校教育における小学校高学年の社会科学習の一環として利用されているという理由に因る。また大人の入館者では年長者の利用が多く、過ぎし日の追憶を楽しんでいるかのようである。家族連れもかなり目立ち、世代の断絶を憂えられる昨今、束の間ではあるが親と子、或いは孫といった間にも民具を通して対話が生まれ、互いの意志疎通の機会ともなっていることは見逃せぬ事実である。

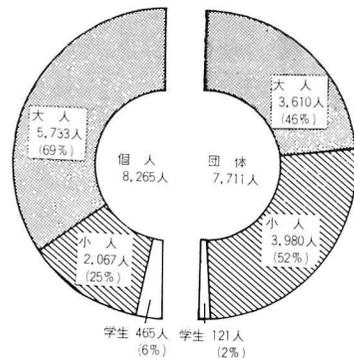
尚、当博物館では単に展示物を観覧していただくのみならず、月に一回の体験学習講座を実施して民俗資料が作られていく過程を理解してもらい、現代っ子には無縁な手作りの貴さといったものを知らしめる機会を設けて

いる。今後とも従来の博物館のイメージと異なった感覚で、常に市民参加の中で博物館の目的を達成しようといわば知的サービスセンターとしての充実に心掛るつもりである。(西久保俊輔)

年 月	49.11	12	50.1	2	3	4	5	6	合計	
開館日数	18	23	23	24	26	26	27	25	192	
1日平均入館	95	53	53	52	113	65	126	102	83	
合計	1,712	1,219	1,211	1,262	2,938	1,682	3,409	2,543	15,976	
個人入館数	大人	990	574	416	385	747	743	828	1,050	5,733
	学生	79	51	19	26	82	57	79	72	465
	小人	258	186	141	248	388	357	271	218	2,067
団体入館数	大人	256	250	389	125	391	349	747	1,103	3,610
	学生				21	28	36	31	5	121
	小人	129	158	246	457	1,302	140	1453	95	3,980

▲月別入館者数一覧表

▼利用者の内訳



## ★★★★ おしらせ ★★★★★

### 民俗博物館の行事予定

- 8月24日 体験学習講座〈手まりづくり〉
  - 9月28日 体験学習講座〈箆づくり〉
  - 10月12日 民俗講座〈日本の民家〉
  - 10月26日 体験学習講座〈葉ができるまで〉
  - 11月23日 体験学習講座〈土臼ひき・トウミ選別〉
- ※体験学習講座は、午前11時と午後2時の2回、それぞれ1時間あまり行います。  
民俗講座は2階の講義室で午後2時より行います。  
※都合により内容などを一部変更することがあります。

### テーマ展について

常設展示は民俗文化を考察するいわば入門であり、より本質を理解する為には特別テーマ展示によって補足しなければならないことについては、民俗博物館だより創刊号、で既に触れたが、「大和の薬と行商」と題する第一回目のテーマ展を今秋(10月10日～11月24日)開催する予定です。奈良県は富山県と並ぶ売薬の産地として知られ、商圏はほぼ全国に及んでいる。そこで本展示では、その販売に全国を行脚する売子(行商人)を中心に彼等の信仰と商組織、そして薬の製法を取り上げ、大和売薬の民俗学的考察を試みるつもりである。

## ● 利用案内

- 観覧時間 午前9時～午後5時まで。  
但し入館は午後4時30分まで。
- 休館日 毎週月曜日(その日が祝祭日の場合は翌日)と年末年始。
- 観覧料 大人 100円・学生 70円・小人 50円。  
20名以上団体割引。
- 交通機関 近鉄郡山駅より奈良交通バスの矢田山町、泉原町、矢田寺ゆきにて「矢田東山」下車。  
国鉄関西本線郡山駅下車、バスセンターまで徒歩10分、奈良交通バス「矢田東山」下車。

### ■ 編集後記 ■

梅雨にしっかりと濡れ、あやしげに輝きながら咲き乱れていた紫陽花もいつしか散って行った。そして、甘い芳香を漂わせながら純白を誇っていたクチナシの花は、もう色あせようとしている。私達が咲かせた展示というこのひ弱な花は、人々の優しい眼指を糧にその生命を燃焼させているものの、新しい息吹を注ぎ込まぬ限り、自から朽ちて果ててしまうことだろう。(尾瀬河骨)